

コウノトリと共に

2025年 第5号 2025年2月1日 発行



発行人：日本コウノトリの会
〒669-6103 兵庫県豊岡市城崎町今津1362
TEL：0796-20-8560 FAX：0796-20-6302
ウェブサイト：<https://www.owss-j.com/>
E-mail:8560toshima@iris.eonet.ne.jp



「能登半島地震から1年 今年も河北潟で越冬し、繁殖行動が見られている幸多♂と幸里♀ペア」
Hi-jetさん コウノトリ市民科学より

- ・ 代表挨拶
 - ・ コウノトリにも選ばれる「サシバの里」を目指して
 - ・ 戸島湿地における繁殖行動（後編）
 - ・ 2024年度 繁殖結果
 - ・ お知らせ
 - ・ ハチゴロウの戸島湿地便
- | | |
|----------------|-------|
| 代表 | 佐竹 節夫 |
| NPO法人 オオタカ保護基金 | 遠藤 孝一 |
| 会員 | 井上 遠 |
| 事務局 | 永瀬 倖大 |
| 事務局 | 永瀬 倖大 |
| ハチゴロウの戸島湿地管理棟 | 永瀬 倖大 |

「私」にとつてのコウノトリ 野生復帰とは

日本コウノトリの会代表 佐竹 節夫

年が明けて、早くも一ヶ月が過ぎましたが、本年もどうぞよろしく願ひいたします。

このところ、毎年コウノトリは飛躍的に増え続け、飛来地や繁殖地も広がりつつあります。中には、冬季の兵庫県南部のように一か所に数十羽単位での大群が見られることもあり、数年前と比べるとすっかり様相が変わつてきました。少なくとも当面は今後も増え続けるでしょう。

では、各地に飛来・繁殖しているコウノトリを見たり接したりして、その地の人々は喜びを感じているのでしょうか？換言すれば、コウノトリをしょっちゅう目にするのが、人々の心境・生活にどのような変化をもたらしているのでしょうか？新年にあたり、考えてみたいと思います。

・豊岡市における市民アンケートでは

立正大学の本田裕子教授は豊岡市での市民の意識調査を放鳥前から実施されており、最近では2020年に実施された市民アンケートがあります。参考に、まとめられたもの

を少しだけ覗いてみましょう。

【野生復帰】に「おおいに賛成」と「どちらかといえば賛成」が80.9%で、その理由の半数が「環境にとつていいことだから」でした。豊岡でのコウノトリ野生復帰の取り組みは、大半の市民の賛同を得ていると言つていいと思います。野生復帰の「これまでの評価」についても、「おおいに評価」と「少し評価」が70.9%で、その理由は「コウノトリが増えた・身近になったから」が大半でした。

この2つの結果は、「環境にいいことだから」野生復帰を支持しており、現にコウノトリの数が増えているので成功している、というものです。でも、アンケートの中には、「事業の効果が不明」「経済効率が薄い」という否定的な意見もありました。つまり、大きな混乱もなく、数も増えているのでなんとなく成功していると感じるけれど、身の回りの生活を見ると環境が良くなった実感はない、というのが実態ではないでしょうか？コウノトリが「豊岡市・環境のシンボル」という抽象的な存在にとどまり、「私」との関係に実感が持てない弱さです。

・コウノトリが絶滅して、何が困るのか？

昨秋、市内の小学校3年生から鋭い質問を突き付けられました。曰く、「絶滅したままだつ

たらダメなんですか？」「コウノトリがいなくても困らないのではないですか？」。ここでも「自分たちにとっては関係ないじゃん」、というよりは、「関連がよくわからない」との素朴な思いのように感じられました。

私はとりあえず、「コウノトリは人間のせいで絶滅の危機に陥つたのだから、人間の責任で救わねば！」と言つたのですが、ふと、学校給食が浮かびました。「今日の給食を思い出してくれ。ごはんは、無農薬のコウノトリ育のお米だ。農家の方たちが君たちに安全でおいしいご飯を食べさせたくて懸命につくられたお米だ。値段が高いので、市役所が援助してくれている。全国のほかの学校ではこんなごはんは食べられないぞ！豊岡がコウノトリを守っている、全国の支援もあるから食べられるんだ。」大人たちが豊岡で取り組んでいることを、今以上にしっかりと子どもたちに伝えていくべきと思いました。ふるさと愛を育てていくためにも。

・野生復帰の取り組みが続いていることは

「本当にありがたいです」

子どもは健やかに育つてほしい。誰もが思うことですが、実際には、農薬に頼らない農業に替えるには、技術・知識、規模、労力、仲間、行政・JA等との連携、すべてに挑戦しなければなりません。

「コウノトリ育む農法」実践農家は、コウノトリや野生復帰の取り組みをどう思っておられるのだろう。中堅の成田智輝さんに話を聞きました。智輝さんは、私がこれまで度々インタビューや講演などに出てもらった市雄さんの息子さんです。お父さんが体調不良のため、昨年から急遽一人で賄われています。

2024年度産米の様子を伺った後、単刀直入に尋ねました。「コウノトリは役に立っていますか？」ようやく全量出荷を終えた智輝さん。はにかみながらにつこりと、「そりゃあ役に立っていますよー。ありがたいです。本当に」。

2024年度はカメムシ被害を受けながらの初の農業経営で、大変なことが多くあったようですが、コウノトリを取り巻く農家の仲間、JA、行政等、関係者の絆で乗り切られた最中の方の、こんな声に接するとうれしくなってしまうって元気が湧いてきます。「野生復帰は立ち止まってはだめだ」と。

・今はコウノトリだけが迎えてくれる。だから

私の住む下宮地区の斎藤高夫さんは、消防署勤務との兼業農家です。お父さんがエコファーマーのリーダーでしたが亡くなられ、一人でコウノトリ育むお米をつくられています。彼曰く、「以前は田んぼに行くと何人かがいてにぎやかで、よく歓談したものだ、今は誰

もない。迎えてくれるのはコウノトリだけだ」「コウノトリがトラクターの近くで餌を探すものだから、餌が足りているのかいないのか気になってしまう。できるだけ餌生物が住めるようにしてやろうとしているけど」
こんな話もうれしくなります。身近にいるコウノトリを見てみると、否が応でも餌のことが気にかかってくる。数の増加と併行して、採餌環境に目を向けられる（行動される）方が増えていくことを願っています。

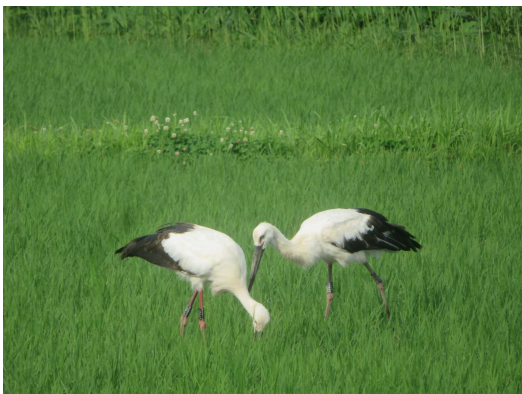
子どもや農家だけでなく、多くの方が「自分にとってのコウノトリ」をお持ちだと思います。心に抱いている気持ち、少しでも動いてみたことを、自分の中にしまい込まずに、まず身近な人に話っていきましょう。出し合ひましょう。小さな事柄の積み重ねで、コウノトリ野生復帰が目指す「人と自然が共生する心豊かな社会」を築いていけるように思います。今年は放鳥20周年、当会もその一角で頑張っていきたいと思っています。

コウノトリにも選ばれる「サシバの里」を目指して

NPO法人 オオタカ保護基金 遠藤 孝一

昨年（2024年）の初夏、「サシバの里」である栃木県市貝町にコウノトリが2羽舞い降りました。栃木県内ではコウノトリが繁殖している小山市やその周辺以外の地域で観察されるのは稀で、市貝町ではもちろん初めてです。初認は6月17日で、鳥類調査から帰る途中たまた

ま私が発見しました。脚環がついており、1羽は「J0662」、もう1羽は「J0645」とあり、インターネット（IPPMOWS）及びコウノトリ市民科学のサイト）で脚環番号を検索すると、2羽とも昨年生まれの1歳のオスで、J0662は広島県世羅町生まれ、J0645は兵庫県豊岡市生まれ、とわかりました。2羽は低い丘の上に立つ携帯電話の電波塔をめぐらに、その周辺の田んぼを中心におもに半径2〜3kmの範囲で生活し、7月12日の午後まで見られました。その後、上記サイトによると2羽は西日本に戻ったことが分かっています。実は、私は12月上旬に兵庫県東播磨地方を訪れ、J0645と感動の再会（こちらの一方的な感情ですが）をしてきました。なおJ0662には残念ながら会えませんでした。後日地元の方から元気に暮らす写真をいただきました。



市貝町に飛来した2羽のコウノトリ

以下に、サシバをシンボルに人と自然が共生するまちづくりを進める市貝町の「サシバの里づくり」について、コウノトリ飛来後の新たな取り組みも加えて紹介します。

・サシバとは

サシバは全長約50cm、翼を広げた長さは約100cmで、カラスより少し小さいタカです。体や翼の上面は赤身のある褐色をしており、雄の顔は灰色、雌の顔は茶色く白い眉斑があります。



杭に止まって獲物を探す→
サシバ成鳥オス



← トカゲ類を捕食した
サシバ成鳥メス

中国北東部、朝鮮北部、日本などで繁殖し、秋になると中国南部や東南アジアなどに渡って越冬します。日本では東北地方から九州地方の低地の農村地帯から山地の森林地帯に夏鳥として渡来し繁殖します。南西諸島の一部では越冬するものもいます。

日本での繁殖期のサシバの生息地の多くは、森林や農地、集落からなる里山環境です。そのような環境で、カエル類、ヘビ類、トカゲ類、昆虫類、ネズミ類など、様々な小動物を獲物として暮らしています。サシバは里山生態系の頂点捕食者であることから、「里山の指標種」とも言われています。

近年、日本においてはサシバの生息域や個体数は大きく減少しており、保護が課題になっています。毎年秋に沖縄県宮古島市を南下するサシバのカウント調査では、1980年代は2〜4万羽だったものが、近年では1〜2万羽になってしまいました。そこで、2006年には国のレッドリストで「絶滅危惧Ⅱ類」に指定されました。日本においてサシバが減少した理由としては、開発による生息地の消失、農地整備による餌動物の減少、耕作放棄による狩り場の減少などが指摘されています。

・サシバの里「市貝町」

そんな絶滅危惧種のタカ・サシバが密度高く生息している地域が市貝町です。市貝町は、北関東の栃木県東部に位置する面積64平方キロメートル、人口一万一千人の里山が広がる小さな町です。

オオタカ保護基金の調査によると、2009年には25km²(5km四方)で26つがいの生息が確認されており、この密度は日本一と言われています。



里山が広がる市貝町環境

市貝町やその周辺にサシバが高密度で生息しているのは、二つの理由があると考えています。一つ目は、地形が入り組んでおり、丘陵地に食い込むような細長い田んぼ(谷津田)が数多くあること。谷津田は林に接する部分が多く、サシバの獲物になる小動物が多いうえ、営巢木に適した木も豊富です。二つ目は、農林業。このような場所は、作業効率が悪いいため、利用されなくなることが多いのですが、市貝町では水田耕作が長く続けられました。また、高級な茶道用の炭である「菊炭」の原料のクヌギやシイタケの「ほだ木」として利用されるコナラが丘陵地の

で生産されていたことから林業も盛んでした。

このような地形的な特徴と農林業の営みが、サシバが密度高く生息できる里山環境を維持してきたのです。しかし、里山環境を作り、維持してきた農林業は、近年では農林業家の高齢化や減少によって衰退しつつあります。耕作放棄された水田や利用されなくなった山林が増えており、人とサシバが共に暮らせる豊かな環境と誇れる地域を未来にどう伝えていくかが、地域の大きな課題となってきました。そこで、オオタカ保護基金ではサシバと共生する地域づくりを町に提案して、行政や地域の人々と共にそれに取組んでいます。

・「サシバの里づくり」

市貝町ではサシバがすむ自然豊かな里地里山を貴重な地域資源として位置づけ、それを生かしながら農林業などを中心とした持続可能な産業を発展させて、まちを次の世代に繋げていく取組みを2010年から始めました。それが「サシバの里づくり」です。コンセプトは「サシバが舞う里地里山を基盤に環境と経済を好循環させることで、まちを次の世代につなぐ」です。2013年度には「サシバの里づくり基本構想」（2014年度～18年度）、2018年度に「第2次サシバの里づくり基本構想・実施計画」（構想：201

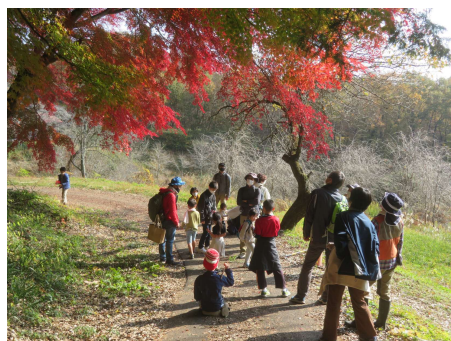
9年度～28年度、計画：2019年度～24年度）を策定しました。

「第2次サシバの里づくり」では、まちの将来像を「サシバが舞う豊かな里地里山が広がるまち」などとし、その目標を達成するための具体的な取組みとして、（1）豊かな里地里山環境を維持し増やす施策、（2）里地里山を活かした安心安全な農林業を増やす施策、（3）里地里山と共生した持続性のある産業を増やす施策、（4）地域に誇りと愛着ある人を増やす施策、（5）里地里山保全と経済活動を循環させる施策の5項目に分け、さらにそれを22の具体的な町の施策に落とし込み、進めています。以下に取組みをいくつか紹介します。

・サシバの里協議会と道の駅 「サシバの里いちかい」

サシバの里協議会は、基本構想で示された取組みを民間レベルで進めるために、2014年に設立された組織です。農家・商工業者・役場・道の駅・環境保護団体などで構成され、都市農村交流促進事業、里山保全事業、人材育成事業、観光まちづくり事業を行っています。気軽に里山を散策して風景や自然を楽しむ「サシバの里さんぽ」、田植えや野菜収穫を体験する「サシバの里DE農業体験」、里山にあ

る民家の縁側や庭などを観光客に開放して、お茶などを飲みながらのんびり過ごしてもらう周遊型・交流型観光イベント「サシバの里めぐり」などのグリーンツーリズムが主要な活動です。



→
里さんぽで、
秋の里山を歩く



←
里めぐりで重要文化財
の古民家を訪れる

協議会の発足と同じ時期にオープンしたのが、農産物の直売や体験活動の拠点となる道の駅「サシバの里いちかい」です。直売所や観光案内所（市貝町観光協会事務所）などとともにサシバや里山を紹介するコーナーもあります。直売所では2019年から、農薬や化学肥料を抑えた「特別栽培米」と無使用の「有機栽培米」の2種類のブランド米「サシバのふるさと」が販売開始されま

されました。

・サシバの里自然学校

オオタカ保護基金も、「サシバの里づくり」に連動して、2016年に道の駅近くに里山の保全と利用を進める「サシバの里自然学校」を開設しました。ここでは、田畑や山林を生きものの生息場所として復元・保全し、生きものの育む農林業を営みながら、自然体験や農業体験の場として活用しています。2024年には、年間延べ300人ほどの子どもや家族が訪れました。プログラムは、子ども対象としてはサシバを観察したり、田んぼの生きものを観察したりする「生きもの塾」、



生きもの塾での自然体験

秘密基地づくりなど自然の中で自由に遊ぶ「野遊び学校」、宿泊して里山や川で遊ぶ「宿泊キャンプ」などがあります。家族対象の「農的暮らし

講座」では、親子で春の田植えから、夏の草取り、秋の稲刈りまで、一連の米作りの作業と里の暮らしを体験します。



野遊び学校での秘密基地づくり

・新たな施策

加えて、サシバの里づくりを推進する最近の動きとしては、以下があげられます。一つ目は「サシバの里里地里山保全創造条例」。市貝町のサシバをはじめ多様な動植物を育む豊かな里地里山を保全し、人と自然が調和した環境を創造するための条例で、2024年4月から施行されました。これは(1)保全地域の指定、(2)里地里山の利用促進、(3)希少野生動植物の保護が柱となっています。これに基づき、捕獲・採集に際して届出が必要な希少野生動植物と捕獲・採集禁止の特別希少野生動植物が指定されました。希少種は96種で、そのうちクロシジミ、ヨコハマシジラガイ、

サシバの3種が特別希少種です。また、多種多様な希少種が生息・生育する多田羅沼湿地が第1号の特別重要里地里山保全区域として指定されました。

二つ目は、「オーガニックビレッジ」宣言。町は生産者・流通業者・消費者による市貝町有機農業実施計画策定委員会を立ち上げて、「市貝町有機農業実施計画」を策定し、2023年度にこの宣言を行い、自然にも人にも優しい有機農産物の生産や消費を促進し、有機農法に取り組む農業者の増加も進めています。

・国際サシバサミット

渡り鳥であるサシバを保護するためには、繁殖地、渡りの中継地、越冬地といった生息域全域で取り組むことが大切です。そこで、サシバの研究者や保護団体に加え、それらの地域の行政機関が実行委員会となり、国際サシバサミットが開催されています。記念すべき第1回は2019年に市貝町で開催され、日本のみならず、台湾やフィリピンからも関係者が集まりました。サミットでは、生息域全域での取り組みや持続可能な地域づくり、生物多様性豊かな里山維持の重要性が確認されました。その後は、2021年10月に第2回が沖縄県宮古島市で(オンライン開催)、2023年10月に第3回が台湾南部の墾丁(ケンテ

ティン）国立公園で、2024年の3月に第4回がフィリピンのサンチェスミラ市で開催されました。サミットへ参加する国や地域も、当初の日本、台湾、フィリピンに加え、韓国やタイなども参加するようになってきました。保護の輪が、サシバの生息地である東南アジア一帯に広がりつつあります。



市貝町で開催された
第1回国際サシバサミット

・コウノトリにも選ばれる 「サシバの里」を目指して

さて、冒頭で記した昨年のコウノトリ飛来後の取組みも紹介しましょう。2羽のコウノトリを熱心に観察したり、撮影したりしていた町民の方々から、「せっかく貴重なコウノトリが市貝町に來たのだから、自然豊かな里山と共生するサシバの里づくりを進めている市貝町として、何かできないか」という提案がありました。その後、役場も入れて話し合いを重ねました。「繁殖個体が増えていることから今後も飛来する可能性は

あるし、繁殖しなくても分散途中の若鳥が立ち寄れる環境を作ることにも価値がある。田んぼだけだと初夏になるとイネに覆われ餌場として使えなくなるので、1年を通して餌場として利用できる水張り休耕田（水田ビオトープ）を作ろう」という積極的な意見が出、話とはほとんど拍子に進んで昨年（2024年）10月25日に「サシバの里にコウノトリを呼ぶ会」が設立されました。12月にはコウノトリ保護の先進地として小山市を訪問して活動を視察するとともに、水張り休耕田の候補地を絞り込み、いよいよ具体的に動き出すところまで来ました。



小山市で視察を行う
「サシバの里にコウノトリを呼ぶ会」の
メンバー

この会の目的は、国の特別天然記念物で、農村生態系のシンボルであるコウノトリが市貝町に飛来・定着しやすい環境を創造・保全す

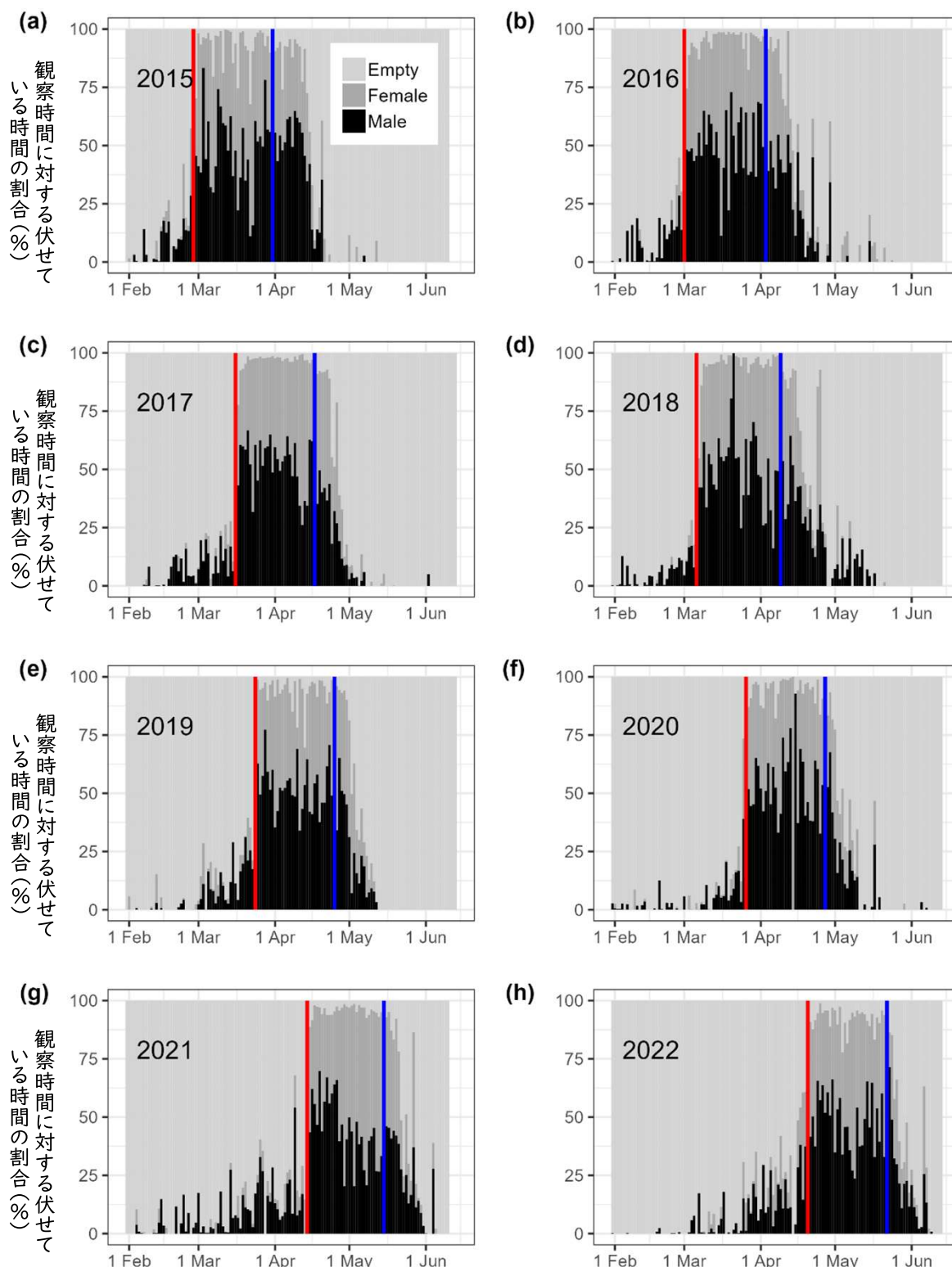
ることを通じて、自然と人が共生する「サシバの里 いちかい」の実現に貢献することです。サシバに加えてコウノトリの視点が加わることで、水辺から森林に至る里山の生態系全体がより良い形で保全されることが期待されます。

・おわりに

生物多様性条約COP15では、2030年には生物多様性の減少を反転させ、2050年には元のレベルまで戻すというネイチャーポジティブを含む生物多様性枠組みが採択されました。日本はこのネイチャーポジティブを掲げた新たな生物多様性国家戦略を策定しましたが、この目標を実現するためには自治体・地域レベルでの取組みが不可欠です。日本では里山と表現される農村地域が生物多様性の保全・維持に重要な役割を果たしていると言われており、日本においてネイチャーポジティブを実現するためには、この地域において生物多様性の劣化を食い止め、回復させることが大きなカギとなるでしょう。10年前に始まった市貝町の「サシバの里づくり」は、ささやかではありますが、まさに自治体・地域レベルでのネイチャーポジティブ実現に向けた取組みです。これからも地域の独自性を生かした「サシバの里づくり」をさらに進め、ネイチャーポジティブの実現に貢献したいと思います。

ハチゴロウの戸島湿地における繁殖行動（後編）

日本コウノトリの会 井上 遠



Inoue et al. 2024 Ornithol. Res.

前回の号にて、戸島湿地でのハチゴロウの繁殖行動について、学術論文として公表した内容の一部を報告しました。前回は交尾と巣材運びについて報告しましたので、今回は抱卵と給餌（吐出し）について報告したいと思います。

詳細な分析内容については、論文

(<https://doi.org/10.1007/s43388-023-00167-9>) を参照してください。PDFをお送りすることもできますので、必要な方は井上または事務局までご連絡下さい。

まずは、抱卵・抱雛についてですが、産卵後、卵が孵化するまでのおよそ33日間、90%以上の時間を雌雄で交代しながら抱卵をしていました。卵が孵化してからもしばらくは抱雛を続けますが、その時間は徐々に減っていきます。抱卵時間も、巣材運びほどではありませんが、ややオスの方が長い傾向にありました。ただし、メスの方が長いという報告や(Cheong et al.

2006・Iwasaki et al. 2019)、雌雄で差はなかったという報告(Yoon et al. 2015; Naito et al. 2020)もあるため、ペアによって変わるのかもしれない。

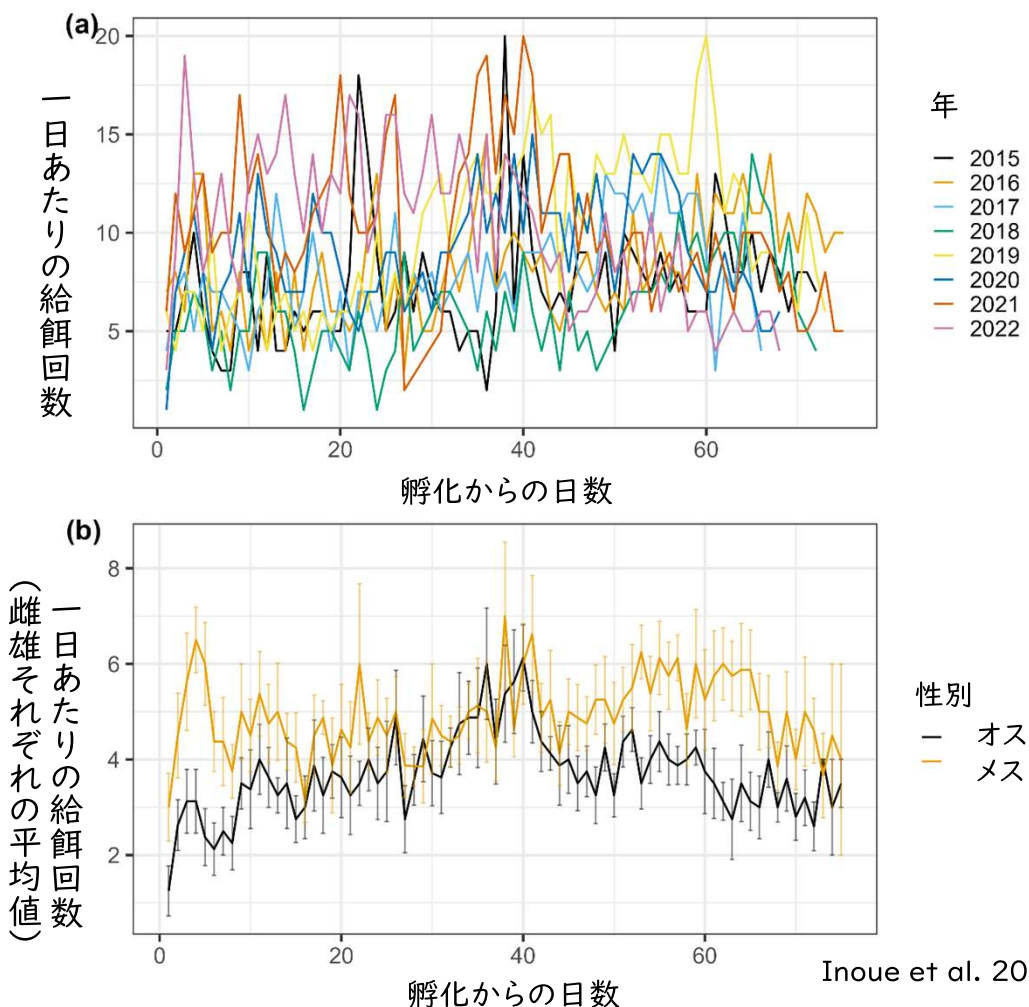
続いて給餌(吐出し)についてですが、明確な季節変化はなく、平均すると毎日8.6回給餌をしていました。年によって回数には違いがあり、2019年(10.0回)や2021年(10.5回)、2022年(10.1回)のように多い年もあれば、2018年(6.0回)のように少ない年もありました。2019年と2021年は3羽、2018年は1羽、それ以外の年には2羽のヒナが巣立っており、ヒナの数が多い年には給餌回数が多く、少ない年には少なくなると思われます。また、給餌回数はオスよりもメスの方が多い傾向にありました。韓国ではオスの方が多いとする報告や(Cheong et al. 2006)、雌雄差がないとする報告(Yoon et al. 2015)もあり、給餌についてもペアによって役割分担は変わるのかもしれませんが。

前回の号から引き続き、それぞれの繁殖行動について、季節変化や雌雄の役割分担をみてきました。いずれの行動についても雌雄で差はありますが、オス親とメス親が協力して、繁殖行動を行っていることもわかりました。鳥類でも種類によっては、メスやオスしか子育て

をしない種もあります。コウノトリの場合は、雌雄で主要な役割は異なっている可能性もありま
すし、それがペアによって変化する可能性もあります。そして、このよ
うな繁殖行動の違いが、ペアの維持や繁殖成功
に影響しているかもし
れません。戸島湿地で
は、亡くなってしまった
母親に代わり、新たな
母親と父親が繁殖を始
めました。このペアの繁
殖行動を明らかにし、
さらには日本国内の他
のペアの行動と比較す
ることで、新たな発見
が生まれるかもしれま
せん。

是非、皆さんのお住
まいの地域での繁殖行
動についても、情報があ
りましたらお寄せ下さ
い。

給餌回数の季節変化



「2024年度 繁殖結果」 日本コウノトリの会 事務局長 永瀬 偉大

2024年度では、全国で63ヶ所の繁殖行動が確認されました。（事務局調べ）

各府県での繁殖数は兵庫県26、福井県8、京都府7、茨城県5、鳥取県5、島根県2、栃木県2、石川県2、千葉県1、新潟県1、広島県1、徳島県1、香川県1、佐賀県1となっています。詳しくは一覧表をご覧ください。昨年は51ヶ所と数えておりましたので、10ヶ所の以上の増加となりました。※前回会報誌より、豊岡市が1ヶ所増えております（伊豆集落で産卵していたため）。

全国での巣立ちしたヒナは134羽となっております。これに北栄町で2羽が放鳥されたので、今年のヒナは136羽と数えています。また、他にも営巣までは至らなかった造巣が確認されており、今年も鉄塔や電柱などに巣づくりに行ったケースがありました。造巣についてはカウントに含んでおりません。

136羽のヒナが野外へと旅立っていきましたが、小美玉市から巣立ちした4羽と、豊岡市出石町上野から巣立ちした4羽の計8羽には足環が装着されませんでした。このうち出石町上野から巣立ちした1羽についてはくちば

しに特徴があると、調査員の「Hi-jet」さんが気づき、事務局から小美玉市に問い合わせるなどして個体を同定しました。コウノトリ市民科学では「出石町上野2024巣立ち個体」とし、その行動を追って知ることが出来ます。日々、コウノトリ市民科学にて情報をお送りくださる皆様、ありがとうございます。

一覧表に抜けや間違い等がございましたら、事務局までご連絡いただけますとありがたいです。HP上となりますが、訂正させていただきます。※表中の「なし」は足環装着なしのコウノトリとなっています。



出石町上野2024巣立ち個体1

撮影 右上:チオぼんさん 右下:めるさん
左上:natifさん 左下:Hi-jetさん

	都道府県	市郡	町村	地名	営巣地	♂	♀	巣立ちヒナ	備考
1	石川県	羽咋郡	志賀町		電柱	J0195	J0205	3	
2	石川県	河北郡	津幡町	湖東	巣塔	なし	J0230	4	
3	茨城県	小美玉市			電柱	J0237	J0346	4	足環装着されず
4	茨城県	神栖市		矢田部	巣塔	J0329	J0342	2	
5	茨城県	神栖市		矢田部	電柱	J0310	J0214	4	
6	茨城県	神栖市			電柱	J0387	J0425	0	
7	茨城県	行方市			鉄塔	J0388	J0259	4	
8	香川県	仲多度郡	まんのう町	造田	電柱	J0126	J0203	3	
9	京都府	綾部市	上杉町		巣塔	J0213	J0170	4	
10	京都府	綾部市	梅迫町		巣塔	J0241	J0233	1	
11	京都府	綾部市	西方町		巣塔	J0220	J0227	2	
12	京都府	綾部市	非公開	非公開	巣塔	J0174	J0251	1	綾部市教育委員会の依頼により
13	京都府	京丹後市	網野町	島津	電柱	J0046	J0053	2	
14	京都府	京丹後市	久美浜町	市場	巣塔	J0150	J0089	2	
15	京都府	京丹後市	久美浜町	永留	巣塔	なし	J0131	2	
16	佐賀県	杵島郡	白石町	八平	電柱	J0141	J0133	1	
17	島根県	雲南市	大東町	大東	巣塔	J0284	J0353	3	
18	島根県	雲南市	大東町	仁和寺	巣塔	J0118	J0051	3	
19	千葉県	野田市		江川地区	電柱	J0155	J0424	2	
20	徳島県	鳴門市	大麻町	坂東	電柱	J0044	J0480	4	
21	栃木県	小山市		下生井	巣塔	J0128	J0238	3	
22	栃木県	栃木市	藤岡町		巣塔	J0341	J0345	0	

	都道府県	市郡	町村	地名	営巣地	♂	♀	巣立ちヒナ	備考
23	鳥取県	西伯郡	大山町	門前	電柱	J0395	J0332	3	
24	鳥取県	東伯郡	北栄町	妻波	鉄塔	J0240	J0172	0	卵撤去し飼育下でふ化、2羽放鳥
25	鳥取県	鳥取市	気高町	日光	巣塔	J0333	J0265	0	
26	鳥取県	八頭郡	八頭町	久能寺	巣塔	J0135	J0144	2	
27	鳥取県	八頭郡	八頭町	徳丸	投光器柱	J0394	J0323	3	
28	新潟県	上越市		吉川区	電柱	J0287	J0250	4	
29	兵庫県	朝来市	和田山町	久田和	巣塔	J0173	J0157	3	
30	兵庫県	朝来市	山東町	三保	巣塔	J0112	J0015	1	托卵、卵は38番ペアの卵
31	兵庫県	淡路市		大町下	巣塔	J0200	J0167	4	
32	兵庫県	加古郡	稲美町	国岡	巣塔	J0289	J0339	1	
33	兵庫県	豊岡市	出石町	森井	巣塔	J0057	J0130	3	
34	兵庫県	豊岡市	出石町	袴狭	巣塔	J0500	J0428	1	
35	兵庫県	豊岡市	出石町	上野	巣塔	J0277	J0152	4	足環装着されず
36	兵庫県	豊岡市	出石町	水上	巣塔	J0097	J0110	3	
37	兵庫県	豊岡市	出石町	伊豆	巣塔	J0381	J0296	2	
38	兵庫県	豊岡市	出石町	伊豆集落	電柱	J0248	J0148	0	電柱から卵撤去、卵は30番ペアへ
39	兵庫県	豊岡市	城崎町	湯島	巣塔	J0122	J0043	3	
40	兵庫県	豊岡市	城崎町	戸島	巣塔	J0391	J0102	3	
41	兵庫県	豊岡市	但東町	唐川	巣塔	J0151	J0501	3	
42	兵庫県	豊岡市	日高町	山本	巣塔	J0011	J0399	3	
43	兵庫県	豊岡市	日高町	広井	巣塔	J0180	J0087	0	
44	兵庫県	豊岡市		赤石	巣塔	J0426	J0017	2	
45	兵庫県	豊岡市		岩井	電柱	J0261	J0185	0	近親ペアのため偽卵に
46	兵庫県	豊岡市		河谷	巣塔	J0178	J0269	2	
47	兵庫県	豊岡市		下鉢山	巣塔	J0054	J0156	3	
48	兵庫県	豊岡市		祥雲寺	巣塔	J0083	J0273	2	
49	兵庫県	豊岡市		庄境	巣塔	J0476	J0059	0	
50	兵庫県	豊岡市		野上	巣塔	J0274	なし	0	
51	兵庫県	豊岡市		福田	巣塔	J0177	J0010	4	
52	兵庫県	豊岡市		森尾	巣塔	J0111	J0099	2	
53	兵庫県	豊岡市		百合地	巣塔	J0025	J0100	3	
54	兵庫県	養父市	八鹿町	伊佐	巣塔	J0013	J0184	0	
55	広島県	世羅郡	世羅町	寺町	電柱	J0317	J0312	1	
56	福井県	越前市	安養寺町		巣塔	J0169	J0132	4	
57	福井県	越前市	大塩町		巣塔	J0376	J0279	2	
58	福井県	越前市	中野町		巣塔	J0481	J0119	0	
59	福井県	越前市		下中津原	巣塔	J0161	J0078	1	
60	福井県	越前町		八田	巣塔	J0377	なし	2	
61	福井県	小浜市		熊野	巣塔	J0314	J0331	0	
62	福井県	小浜市		太良庄	巣塔	J0206	J0196	4	
63	福井県	鯖江市	田村町		巣塔	J0301	J0218	2	

お知らせ

○韓国での合同コウノトリ人工巣塔設置について

前回会報誌でもお知らせしておりました「韓国でのコウノトリ愛の会 中央会（韓国市民団体）との合同コウノトリ人工巣塔設置」の日程が決まりました。

日時：3月17日～19日

当初は秋を予定しておりましたが、日程を調整し3月に行う事となりました。韓国側の希望により、清州（チョンジュ）国際空港（CJ）でピックアップしていただく予定となっております。18日に巣塔を建て、17日と19日は基本移動日になると想定しています。場所はセマングムとなります。飛行機の予定としては、以下の時間の便を予定しております。

3月17日

関西国際空港11:00↓清州国際空港12:45

3月19日

清州国際空港9:55↓関西国際空港11:40

※暫定的なものですので、変更の可能性あります。

参加ご希望の方や、不明な点等がありましたら事務局までご連絡ください。なお、このJAMMINさんとのコラボレーションチャリティーグッズの寄付は、人工巣塔設置に活用させていただきます。

○オリジナルチャリティTシャツの

ご協力ありがとうございました！

京田辺市のチャリティファッションブランド「JAMMIN」さんとのコラボレーションで、7月15日～7月21日の1週間限定でチャリティファッションアイテムが販売されました。皆様のおかげで、十五万八百七十円の寄付をいただきました。皆様のご協力ありがとうございました。

いただいたチャリティについては、前ページでお知らせしている3月に予定されている「韓国でのコウノトリ愛の会 中央会（韓国市民団体）との合同コウノトリ人工巣塔設置」に活用させていただきます。



チャリティのご協力ありがとうございました！



○コウノトリ全国一斉調査のお願い

日時：2025年3月23日（日）

例年同様に、全国の皆さんに参加いただき、コウノトリ全国一斉調査を行います。ぜひ、調査に加わって下さい。

調査方法

①「コウノトリ市民科学」調査員ページ

②メール

③電話の3手段で行います。

（②と③の連絡先は表紙に記載）

結果は、コウノトリ市民科学と日本コウノトリの会ホームページで発表します。

○原稿・川柳をお寄せ下さい！

この会報誌は、できるだけ皆さんの想いを反映できればと思っています。一緒に楽しい会報に成長させていきたいので、皆さんのご参加をお待ちしております。普段の生活の中での気づきやコウノトリとの出来事、気持ちなどを原稿や川柳でお寄せ下さい。

送付方法

○原稿は1300字程度を目安に。メールまたはFAXにてお送りください。

○川柳は、作品と解説をメールまたはハガキにてお送りください。

（送り先 表紙に記載）

メールの件名は、それぞれ「会報誌の原稿・川柳」など、わかりやすいものにしていただけますと、ありがたいです。

※お写真を本文につけられるのを希望される場合は、メールの添付でお送りいただくか、オンラインのファイル共有をご利用ください。また、お写真の枚数等によっては、本文の文字数が前後する可能性があります。

○会員を募集しています！

私たち「日本コウノトリの会」は、コウノトリがかつてのように日本各地で暮らせるようになってほしいと願い、そのために各地で人と自然が共生する環境づくりを進めていくことを目的に結成された市民の会です。○目撃情報の共有 ○普及啓発 ○ビオトープづくりや人工巣塔設置の活動を行っています。

■正会員（一緒に考え、行動される方）

「入会金」 10,000円

「年会費」 2,000円

■賛助会員（当会の活動を支援していただけの方）

「年会費」 個人10,000円

団体 企業10,000円

〇コウノトリの生息地を支える市民交流会

開催報告

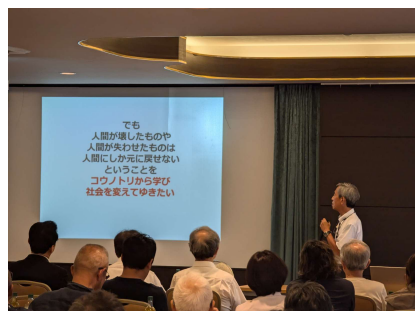
全国・韓国から総勢89名の方に参加いただき、3年ぶりに開催しました。(公社)日本動物園水族館協会長・よこはま動物園ズーラシア園長の村田浩一氏、地球環境データコモンズ准教授の安川雅紀氏による基調講演と各地からの取り組み状況報告をしていただき、交流を図りました。

・基調講演

村田氏は、地域個体群の遺伝的多様性の低下が絶滅に至る大きな要素であることを、かつての「農家と但馬牛とー2羽のコウノトリ」に写るコウノトリが全員兄弟関係であった事実から紹介され、遺伝的多様性の低下や環境攪乱に対応するには、野生復帰が生物多様性の改善や回復にどのように貢献しているかをしっかりと評価する必要があると強調されました。

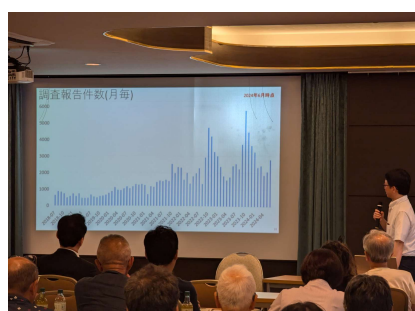
また、近年の生物多様性と経済の関係の変化についても述べられ、TNFD(自然関連財務情報開示タスクフォース)やネイチャーポジティブが提唱されているように、自然環境の保全が経済活動に不可欠であるという認識が広がり、企業が環境問題にどう向き合うべきかが問われていることを提起されました。

質疑応答では、個人としての行動について、「自分の生活が環境に与える影響を見直し、足元から変革を進めることが大切である」と述べられました。



安川氏は、「コウノトリ市民科学」とは、コウノトリの目撃情報を各地域の市民が発信し、その情報を誰もが見れるデータベースをウェブサイトで共有しているシステムであることを改めて示されました。市民科学に参加している調査員、報告件数は右肩上がりが増えており、このシステムは国内のみならず、オランダや特にフランスからのアクセスが増加していること等も紹介されました。今後の展望としては、DIAS(データ統合・解析システム)のデータを活用することで、気候変動とコウノトリの関係や餌生物との相互作用を分析することが可能になると説明され、最後には日々、目

撃情報を登録いただいている調査員の皆さんへの感謝の言葉で締められました。



・各地からの報告

「広島県世羅町」

昨年(2023)年から電柱に営巣しており、2024年度は6月21日に巣立ちが確認されたこと。また、ナゴヤダルマガエル(ナガトビ)の保護活動も行われているので、捕食者とコウノトリとの共存の在り方について問題提起がされました。生物多様性や営巣場所等をめぐっての人間同士のいざこざがあり、それをどう解決するかが今後の重要な課題であると説明されました。また出席された奥田世羅町長は、少子高齢化から子育てのシンボルのコウノトリが来てくれて盛り上がりつつあり、豊岡とも4時間しか離れていないため、今後も豊岡市をはじめとして、交流を続けていきたいとあいさつされました。

「河北潟（石川県津幡町）」

2022年から繁殖しており、1月1日に発生した能登半島地震後は巣に一時寄り付かなかったものの、4月には繁殖を再開。巣塔近くにカメラを設置し、ライブ映像での観察も行われています。石川県ではコウノトリの飛来数が増加し、7月には最多の数に達しました。

「関西広告社（兵庫県加古郡稲美町）」

社員に健康でおいしいお米を食べてほしいという想いから農業プロジェクトに取り組まれ、無農薬のシンボルとしてコウノトリ保護活動を進められてきました。会社の敷地内に建てられた人工巣塔で2022年から繁殖しています。巣塔に設置したオブジェがデコイの効果で誘引できたのでは、と報告されました。

「韓国」

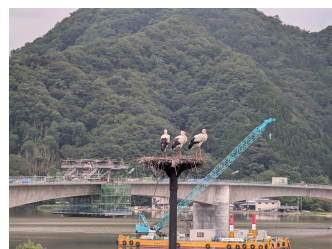
2015年に初放鳥を行い、2016年には72羽の雛が誕生しました。その後、各地でコウノトリの営巣が確認されており、現在、個体数が225羽にまで増加しています。個体数の増加に伴い、コウノトリ愛の会中央会では広報活動やモニタリングや写真撮影者への教育など活動内容が増えてきました。また、昨年、対馬に日本コウノトリの会と共同で人工巣塔を設置した。この取り組みは、今後のコウノトリ保護にとって重要な一歩となると述べました。



各地からの報告・質疑応答

その後、小浜市からのお知らせや、会場のあさぎり荘さんの支配人から、歓迎のあいさつがありました。あさぎり荘では、JOO22とJOO43♀のペアが繁殖し、当日はご厚意により旅館の客室から、ペアのヒナたちを見せていただきました。オスが負傷により入院するトラブルもありました。

りましたが、巣塔と同じ目線から、参加者の皆さんと一緒に元気なヒナたち様子を観察しました。



夜の懇親会では、大いに弾けて親密な交流となり、明日への鋭気を養うものでありました。ご参加、ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。



ハチゴロウの戸島湿地便り

戸島湿地管理塔 永瀬 偉大

2023年4月より、日本コウノトリの会が「豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地」の指定管理者となりました。こちらでは、戸島湿地の様子をお届けします。今回は初回という事で、少し長いですが、お付き合いください。

戸島湿地のペアの状況

戸島湿地ではJ0391♂とJ0294♀が2008年より湿地内の人工巣塔で繁殖しており、15年間連続で子育てを頑張っていました。しかし2023年に奥さんのJ0294が列車との事故で亡くなることとなりました。2歳でした。

事故の後、J0391は一人となって湿地周りで過ごしていました。その年の繁殖難しいだろうと考えていましたが、2017年頃から戸島湿地周辺に姿を見せ、巣にもちよっかいをかけていたJ0102♀がJ0391にアプローチをかけるようになりました。他の場所では1週間程度で新しいパートナーを迎え入れる例があったので、J0391はどんな反応を見せるのかドキドキとちよっぴりの不安を持ちながら見守っていました。



J0391とJ0294

J0391♂のJ0102♀受け入れ

J0102がどんどんJ0391にアプローチをかけるようになりましたが、J0391はそれを拒んでいる様子でした。まるでJ0294の帰りを待っているように。ただ、J0391の対応も次第に軟化していききました。初めは周辺の電柱にとまるのも拒んでいましたが、次第に許すようになり、近くの田んぼに降りるのは…湿地に降りるのは…と、巣塔への距離がだんだんと縮まっていきました。そして3月10日、J0102の猛烈なアタックが実り、J0391との交尾行動が確認されました。J0294が亡くなって31日目でした。



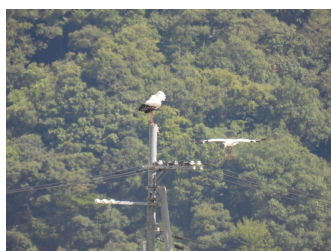
J0391とJ0102
初交尾行動

その後3月24日に産卵を推定し、4月25日にヒナがふ化。見事3羽の子どもたちを巣立ちまで育て上げました。

J0102♀の入院と退院

巣立ちした子どもたちも親元を離れた8月1日、J0102がネットに絡まったためコウノトリの郷公園に保護収容されました。退院は9月12日になりました。

退院の放鳥当日は、ペアのJ0391とJ0102不在の間にJ0391と仲良くしていたJ0265♀が湿地の近くにいました。J0391がJ0102を温かく迎えてくれることを祈っていると、J0265がJ0102を追いかけて始めてJ0391はそっけない知らんぷり。がつくりと来ました。奥さんが追われたなら、守ってやれよ！と。その後J0102は湿地から少し離れた川からの入り江の上空を旋回して上昇。姿を見失いました。



上:J0102解放 放鳥
下:電柱J0391
飛翔J0102

3日後の9月15日、J0102が巣塔に帰巢し、そのまた2日後に田んぼで一緒に採餌している様子が観察されましたので、ペア解消ではないのだと、ホッとしました。

ーそうは問屋が卸さない2年目の繁殖ー

J0102は、退院してから10月に2回鳥取県まで飛んでいくことがありましたが、それ以外は戸島湿地周辺でJ0391と仲良く過ごしている様子で、1年目の子育てをスムーズに終えてくれたので、次の子育てもトラブルなく成功してくれそうだと期待していました。

そう、とんぱ子に進むと思っていました。

2024年の繁殖の違和感。初めの予兆は巢造りでした。例年に比べて、繁殖期の3月になってもペアが巣材を運びませんでした。次に交尾行動回数。昨年は1日につき4回〜9回の交尾行動を行っていましたが、3回〜4回程度の交尾行動を続けていました。なかなか繁殖意欲が上がらないのかと思っていた矢先、3月15日産卵しました。J0391とJ0102は焦ったかのように忙しく巣材を運び始めました。予想していなかった産卵だったようです。翌3月16日、早速のトラブルが。J0102が巣から離れてカラスに卵を盗られました。翌日には第2卵を産みましたが、抱卵の割合が

夫のJ0391のほうが多いように見られ、飲まず食わずで卵を温めているJ0391が、たまたま巣から出て行くことがあり、4月5日に2卵4月6日に1卵カラスに盗られ、卵を全て失いました。J0102は1日巣に戻ってこない日があるなど、夫婦の抱卵バランスの悪さが原因だったように予想しています。また、J0102は左足を痛めている様子も見られて、足の不調が抱卵バランスに影響したと感じています。



卵を持っていくカラス

その後、4月8日より再度交尾行動を始め、4月25日に産卵しました。J0102の足の状況は芳しくなかったようで、犬座している状況での交尾行動等がありました。第2クラッチは無事成功。5月26日に1羽目がふ化し、8月7日に3羽のヒナが巣立ちしました。



第2クラッチで育った
ヒナ3羽

夫婦の頑張りには拍手を送ると同時に、「気を抜いていると思わぬ展開が待ち受けている」という事を思い知らされました。緩んだ気はありませんでしたが「もう一度ふんどしを締め直さないと」と思われました。

〇編集後記

放鳥20周年を迎える。その間、コウノトリ湿地ネットから日本コウノトリの会とつながり、昨春には20代の事務局長が誕生した。理事には若い女性も加わり、事務局をサポートする体制もできた。今後の活動やシニア世代の役割を熟慮して、話し合う時間を大切にしていきたい。(森)

先日、渡良瀬遊水地から野田市を経由し、神栖市まで関東のコウノトリの足跡をたどってみました。地図では短い距離でも、車で走ると意外と遠く感じました。けれど、コウノトリにとっては風に乗る、川を目印に自由に移動する道のりなのかもしれません。そう思うと、利根川沿いに行くたびに、つい空を見上げてしまいます。(大坂)

最近ますます社会全体が貧しくなり、余裕がなくなってきたように感じます。コウノトリが生息し続け、私たちが自然からの恵みを受け続けられるような社会を作るために、私が出れることを考え、続けていきたいと思っています。(井上)

暑かった夏が長く続いたので、冬はそこまで寒くならないだろうと思っていました。が、すっかり寒くなりましたね。(永瀬)